

三、風雪を冒してゾジラル嶺を過ぐ

山道高嶺の殿

雪中過嶺の理由

身を鞍上に縮めて風間を候す

印度の寶庫、カシミアの大森林

二十四日、午前八時十分雪を冒して發し、十時三十分ゾジラル嶺に向ひ、正午十二時全く通過し畢れり。嶺は實に海拔一萬一千三百尺、之を山道高嶺の殿とす。斯る。高嶺を超ゆるに當りて、途中俄然の降雪は兎に角、既に前日來の雪天に拘らず、之を冒すは冒險の嫌なきに非らざるも、之を爲すに故あり。蓋し該嶺は降雪度を重ねるに従ひ、次第に超過容易らずと聞くに因り、是日風の微なるを幸に發途したり。穩かなる雪天も、追に嶺頂吹雪を起し、唯さへ空氣の稀薄、呼吸の促迫せるに、凍風雪を捲いて、驀然として至り、颯々聲を成し、寒氣骨に透る。馬爲めに進み得ざるもの數回身を鞍上に縮めて、風間を候して進みたり。昇降坂共に緩にして、殊に降坂は新に開設したる中腹道にして、幅二米突許山は綠泥岩多く、嶺南に樺、松、楊柳、樅、落葉松と、此順序に依て漸次に茂生し、愈々下れば愈々鬱蒼、遂に全山悉く森林と爲る實に印度の寶庫たるカシミアの大山林とす。時しも降り積る六花は翠綠と相映じ、天下の壯觀を極む。況んや沙漠に厭き禿山に倦みし予が、一朝此の絶景に對し、端なくも山紫水明の故國を想起し、萬感一時に催して、手綱取る手は何時しか緊